

## 「暮らし」語りの変容

——『暮らしの手帖』をはじめとするライフスタイル雑誌の比較分析——

阿 部 純\*

### 1. はじめに

『暮らしの手帖』2020年早春号に、「丁寧な暮らしではなくても」との見出しが掲げられ、Twitter などさまざまな情報メディアで話題となった<sup>1)</sup>(図1)。『暮らしの手帖』は、この号から北川史織氏に編集長を交代し、誌面のデザインともども刷新を図ったタイミングである。この「丁寧な暮らし」というフレーズは、2000年はじめ頃に創刊ラッシュを迎えた、『ku:nel』や『天然生活』といったライフスタイル誌を代名詞として、暮らしの描きようなどに対して用いられたフレーズである<sup>2)</sup>。普段の暮らしの一つ一つの所作を「基本」に立ち返って「丁寧

にしていくことで、暮らしに彩りを加えていくという点で、ライフスタイル雑誌の読者たちの支持を得た一方で、批判的な意見も少なくなかった。「丁寧な暮らし」という言い方によって、自身の「丁寧」ではない暮らしに罪悪感を持つようになってしまった、「丁寧に暮らさないといけない気がする」といったオブセッションを感じるといった意見は、「丁寧な暮らし」で検索エンジンにかけるとすぐに見つけることができる<sup>3)</sup>。2020年早春号の『暮らしの手帖』は、この「丁寧な暮らし」に代表される暮らし方についての見えない「闘争」に対して、そこから「降りる」ことを宣言するものとして映る。

ここで問いたいのは、「丁寧な暮らし」とは何をめぐる「闘争」であった(もしくは、ある)のかということだ。先にも述べたように、ライフスタイル雑誌は、2000年代に入っただけの時期に、一つの大きな盛り上がりを見せたジャンルである。これらのライフスタイル雑誌の登場は、『出版年鑑』に「同誌はシンプル&スローライフをテーマとするライフスタイル雑誌で、実用情報ではなく、読み物とビジュアルが中心。新ジャンルの雑誌だが、売れ行きは良好」(2004年版:77)と行数を使って説明が加えられている。「新ジャンル」と言われていることから、「暮らし」について語る手法が、この時期を境に新たな展開を見せ始めたと言える。

そこで、本稿では、主に「暮らし」に特化した情報を載せる商業雑誌の内容分析を行い、「暮らし」を語るとは何についてどのように語ることであった(ある)のかを明らかにすることに



図1 『暮らしの手帖』2020年早春号 表紙

\* 広島経済大学メディアビジネス学部メディアビジネス学科准教授

ある。「暮らし」語りの歴史的変遷をたどるために、本稿では、1948年に創刊され、いまもなお継続して刊行されている『暮らしの手帖』を中心に、「暮らし」の中でもどのような要素に着目し、どのような写真や文体を使って語られているのかを見ていく。また、2000年以降に刊行されたライフスタイル雑誌『ku:nel』<sup>4)</sup>『天然生活』の2誌についても、同じように内容分析し比較を行うことで、「暮らし」を語る手法がどのような展開を見せつつあるのかについて展望する。

これまで、『暮らしの手帖』に関する先行研究としては、後述する「商品テスト」や広告を取らない雑誌としてのあり方、そのほか、初代編集長の花森安治の経歴や思想に関するものが主であり、「暮らし」の描き方に特化したものは管見の限りでは3章で言及する雪野まり(2008)の論考のみである。そこで、本稿では、婦人総合誌やファッション雑誌といったライフスタイル雑誌に連なる雑誌メディア研究の系譜を整理し、「暮らし」を読み取る分析手法を提示する(2章)。その上で、『暮らしの手帖』『ku:nel』『天然生活』の3誌について内容分析を行い、中でも特に「料理」と「ライフスタイル」に分類されるページの構成について分析を行う(3、4章)。最後に、本稿の分析結果を整理した上で、「丁寧な暮らし」として語られる「暮らし」とはどのようなものであるかについて明らかにする。

## 2. 先行研究

### 2.1 ライフスタイル雑誌の分類・整理

はじめに、本稿で取り上げる「ライフスタイル雑誌」とは何かから整理したい。出版ニュース社から刊行されていた『出版年鑑』の分類では、本稿の分析の中心となる『暮らしの手帖』は、大枠では「女性誌」の中に位置づけられている。「女性誌」の中には、ファッション誌をはじめ、

生活情報誌、結婚情報誌、マタニティ誌、OL向け地域情報誌なども含まれており、この中にライフスタイル雑誌も組み込まれている。『暮らしの手帖』については、この「女性誌—家庭実用情報誌」に位置している。一方、『ku:nel』や『天然生活』は「女性誌—ナチュラル系ライフスタイル誌」に分類されている<sup>5)</sup>。

「家庭実用情報誌」と「ナチュラル系ライフスタイル誌」の違いについては、次節で系譜として説明するが、この両者に分類されているその他の雑誌からも推測が可能だ。例えば、前者には、2009年に93年間の幕を閉じた『主婦の友』をはじめ、『おはよう奥さん』や『クロワッサン』『ESSE』などが並んでいる。このことから、「家庭実用情報誌」とは、2000年より前に刊行され、かつ家事を主に行う立場にある「主婦」に向けた情報誌というスタンスが強い。対して、「ナチュラル系ライフスタイル誌」は、上述の2誌のほか、『リンネル』や『大人のおしゃれ手帖』など、2000年以降に刊行された比較的新しい雑誌がラインナップされ、幅広い情報や生活のノウハウが載っているというよりは、一人一人の「生活のさま」に特化した読み物が多いものが分類されている。

### 2.2 「家庭実用情報誌」の中のジェンダーと「ナチュラル系ライフスタイル誌」の登場

「家庭実用情報誌」については、これまでジェンダー研究の中で多くの分析が積み上げられてきた。「家庭実用情報誌」研究の端緒に挙げられるのが、次の4誌に関する分析である。大正期に創刊された「家庭を幸せに導くというコンセプト」(清水 2001:69)の『主婦之友』『婦人倶楽部』の「戦前派」2誌と、「生活」を誌名にもち「新しい生活技術を提供すること」(前掲)を目指した『主婦と生活』や『婦人生活』の「戦後派」を合わせた4誌が、婦人四大実用誌の時代を牽引していったとされる。大正期か

ら昭和初期の女性の高学歴化と識字率の上昇により、「中流家庭の婦人」であるところのサラリーマン家庭の主婦たちが、これら婦人誌の読者となり、主婦という性役割を受け入れていくようになる（山尾 2004）。4誌ともに、新年号は100万部を超える売れ行きだったとの記録もあり（塩沢 1982）、その影響力は多大なものであっただろうと推測される。本稿で分析する『暮らしの手帖』も、この後発組の「戦後派」と同じ時期に出た雑誌である。

日本における婦人雑誌の原型は、「主婦の友」創刊者石川武美によって、つくり出されたと言われている。それは、表紙を美人画で決め、実用的な料理だの医学、服装、おしゃれ、性と愛、育児などの記事を盛り沢山に入れ、さらに付録をいくつも付ける編集方式の雑誌だった（塩沢 1982：42）

ここに書かれているように、婦人雑誌には表紙や誌面構成などにおいて暗黙の「型」があるとされ、当時の婦人たちが必要とするあらゆる情報が一挙に掲載されているものであった。このような総合的な雑誌形態を持つ婦人（女性）誌が、「セグメント化」（橋本 2017）していくのは、1970年代以降のことである。

70年代前半までは画一化した主婦役割規範が支持された時代、70年代後半から80年代前半は保守／革新を含めたさまざまな規範を描く雑誌がことごとく否定された時代といえる。そして、80年代半ばからは「料理」という家族のための情報に特化した雑誌の時代、90年代は格差やライフコースに応じた規範が提示された時代、2000年代は役割規範への抵抗や、さまざまな新しい規範が示され始めた時代、といえるだろう。（橋本 2017：184）

1970年代に婦人四大実用誌の影響力が斜陽になっていくことに合わせて、台頭したのが『オレンジページ』や『レタスクラブ』といった、出版業界とは異業種の大手流通系企業が発行した生活情報誌だった。これらの雑誌では、掲載内容のうちの実に2～3割が料理に関するものとなっており、「主婦に対する家事役割の期待という旧来の性役割の根強さと同時に、けっこうそれが“面倒くさいこと”であることを認識しはじめた女性の意識が反映されている」（山尾 2004：237）という。節約や簡単なレシピの料理情報が重宝され、そのことに伴って、料理をはじめとした家事をする主体に揺らぎが始める。そして、その揺らぎは女性たちのライフコースの選択肢の多様化につながっていく。本稿の最後に分析に加える『ku:nel』や『天然生活』は、この背景のもとに生まれたライフスタイル雑誌ということになる。

（筆者註 マガジンハウスは）2000年代に入ると、『an・an』増刊号として『クウネル』という雑誌を創刊する。『クウネル』のキャッチフレーズは「ストーリーのあるモノと暮らしを考える雑誌」であった。『カーサブルータス』でも推し進められていたライフスタイル路線が、ここでは「暮らし」としていっそう強調され、カタログ雑誌的な記号消費に終止符を打つかのように、敢えてファッションを排除するような姿勢が見て取れる。まさに誌名の『クウネル』＝「喰う寝る」が示すように、これからは「衣食住」の食（喰う）と住（寝る）こそが重要なのだという予言にすら思える。（米澤 2018：5）

ここでは、「家の仕事」のノウハウを知るというよりも、「暮らし」という、「主婦」や「家事」よりはジェンダー色の比較的弱い言葉で、自身

の暮らしについて再考させようとするさまを読み取ることができる。それでは、同じ「暮し」をタイトルにもつ『暮らしの手帖』は、「暮し」をどのように語り、どのようなメッセージを発信してきたといえるだろうか。

### 3. 分析方法・対象

#### 3.1 分析方法

本稿の分析方法については、井上輝子ら女性雑誌研究会が行ってきた内容分析（1989）や、辻泉が行った男性ファッション誌の内容分析（2013a）の方法に依拠した、計量的な内容分析の手法を取る。井上らの『女性雑誌を解説する—COMPAREPOLITAN』では、ファッション誌の内容分析に必要な項目を示し、計量的な分析からジェンダーの抽出や異文化比較ができることを明らかにした。井上ら（1989）が、同年同月の日・米・メキシコのファッション誌を横断的に比較分析したのに対し、辻（2013a）では、井上らの分析項目を踏襲し、同年同月に発行された日本の男性ファッション誌のジャンル横断型の比較と、雑誌『popeye』の全号にわたる内容分析を行い、時系列的な比較分析を行っている。

本稿では、1948年に刊行された『暮らしの手帖』の全号の内容分析が叶わないため、1950年から5年ごとの秋号に限って、全ページの構成割合を比較するという時系列的な分析を行い、「暮し」の描き方についての変遷を見ていく。内容分析の項目としては、辻（2013a）にならい、井上らの分析項目の大分類と中分類を採用した（表1）。また、2005年以降については、『ku:nel』や『天然生活』といった新しいライフスタイル雑誌の内容分析も合わせて行い、こと2000年代に入るにおいて「暮らし」の語りがどのように変化したのかについての比較を行う。

ファッション誌分析において、誌面の広告分析も大事な位置を占めるが、『暮らしの手帖』は

表1 内容分析の項目

大分類	中分類
1 おしゃれ	11 美容
	12 ファッション
2 家事	21 料理
	22 裁縫
	23 インテリア
	24 育児・教育
	25 医学・健康
3 生き方	26 家庭・家政・家事
	31 恋愛・友人
	32 家庭生活
	33 仕事・職場
	34 セックス
	35 心理・救済
4 余暇	36 ライフスタイル
	41 文化
	42 レジャー
5 できごと	43 食べ物
	51 政治・経済・社会
6 その他	52 事件・時の話題
	61 読者投稿
	62 自社広告
	63 その他

自社広告以外を掲載しない方針であるため、本稿においては広告に関する比較分析は行えない。また、辻（2013a）においては、時系列比較として、各号の内容をコンパクトに表現した表紙グラビア上の見出しに着目した手法を展開しているが、こちらについては、初期の『暮らしの手帖』は表紙にテキストを置かない方法がとられていることもあり、今回は採用しなかった。

#### 3.2 分析対象『暮らしの手帖』について

本稿で取り上げる『暮らしの手帖』は、1948年9月に、大橋鎮子姉妹と花森安治によって創刊された雑誌である。創刊時は、『美しい暮らしの

手帖』という名前で刊行され、誌面の多くは衣服の作り方に関するものであった。物が不自由な時代に、足りないものをどう充足させるかを考え、「当時は何もないから、夢、ただの夢ではなく手の届きそうな夢を雑誌に載せていった」（大橋 2001：101）という。

『暮らしの手帖』については、花森や大橋に近い人たちによる回顧録のほか、稀代の雑誌ということで、その制作手腕や手法に着目した文章が多く残されている。1948年に創刊され、婦人四大雑誌が台頭するちょうどその時に創刊した雑誌であるが、『暮らしの手帖』は、『主婦の友』のような総合誌の「型」にはまっていないところに特徴がある。表紙には、家具や台所の様子の写真が使われたり、花森自身が制作した絵画などが使用されたりした。外部から広告を取らない姿勢は今もなお続いている。

広告を取らない姿勢を貫くことで、他誌にはない企画を行うこともできた。暮らしの手帖研究室が主催する「商品テスト」は、第26号で初めて登場し、ソックス、ストーブ、ベビーカーなど、一つの対象について、使い心地や耐久性を科学的に検証するという『暮らしの手帖』の名物企画である。誌面には写真やグラフが多用され、何ヶ月間にもわたって検証したことが、テスト風景やテスト時に使用されたものの積み上がった写真から伝わってくる。物のない時代から、経済成長期に向かっていく最中の新たな家財が増えていこうとする時に、何が良い製品と言えるのかという指標を読者に啓蒙すると同時に、

メーカーをも教育する意図があったという（大橋 2001）。

花森については、戦時中に大政翼賛会のプロパガンダ活動に携わっていたことも指摘され、その反省から本誌を通じて反戦を訴える記事も多く作られたと言われる<sup>6)</sup>（雪野 2008）。例えば、読者からの投稿を呼び込むなどして、「戦争中の暮らしの記録」や『一銭五厘の旗』を刊行している。次章でもふれるが、歴史的、社会的な出来事に即した誌面づくりが徹底されているのが、『暮らしの手帖』だと言える。

この『暮らしの手帖』の「第1世紀」<sup>7)</sup>については、雪野まり（2008）において、内容割合等の分析がなされている。ここでは、『暮らしの手帖』の目次の「見出し」から、「暮らし」「人間・世間」「すまい・工作」「料理・食べもの」「服飾」「商品テスト・買物／買物案内」「こども」「健康」「あれこれ」の9つの項目に分類し、構成割合を見ていくことを試みている。分析を「第1世紀」に限定しているのは、第1世紀から第3世紀までの1号の見出しを先の項目で分けて割合を出してみた時に、「構成割合は第1世紀と大きく変わることはなかった」（雪野 2008：48）からだという。雪野が分析した第1世紀の特徴について、表2にまとめた。

表2から、『暮らしの手帖』は、読者とのやりとりから誌面の方向性を定め、社会が「商品を買う」時代に移ることを見越して、消費に関する誌面構成を作ってきたことなどがわかる。雪野（2008）では、「(3)完成期」についての内容

表2 『暮らしの手帖』第1世紀の特徴

区分	号数	出版年	特徴
(1)創刊期	1号～19号	1948-1952	・読者参加による誌面づくり ・花森が関わっていたとされる『婦人の生活』の誌面構成の影響
(2)確立期	20号～38号	1953-1956	・花森を中心とした編集体制の確立 ・「商品テスト」の登場、「工夫」から「商品」へ
(3)完成期	39号～100号	1957-1969	・誌面構成の原型の完成

※雪野（2007）より筆者作成

割合が詳しく算出されており、「暮し」や「あれこれ」といった教養記事が、1957年には30%中盤だったのが、1968年には50%近くまで上がっていること、そして、実用的な記事としては「すまい・工作」「料理・食べもの」「服飾」をまとめた「衣食住」が20-30%の間で比較的高いという結果が出ている。実用的な記事よりも、教養的な記事が多いことが、『暮らしの手帖』第1世紀の特徴と言えよう。

本稿では、「家庭実用情報誌」と「ナチュラル系ライフスタイル誌」の異なるジャンルの雑誌を分析することや、今後ファッション誌などの他のジャンルとの差異を見極める可能性も鑑み、雪野のような『暮らしの手帖』の目次分類に依拠した項目ではなく、広くファッション誌の分析に使われている表1の項目を使って内容分析を行うこととした。

## 4. 分析結果

### 4.1 『暮らしの手帖』における内容割合の変遷(言及分野)

『暮らしの手帖』を、1955年から2020年まで5年ごとに秋号に絞って内容割合を算出したものが、表3である。1965年の秋号のみ、残念ながら手に入れることができなかったので、計13冊からの算出となった。

一つの号の中で、一番多い項目について取り出してみると、「21 料理」が7回、「25 医学・健康」が3回、そして「24 育児・教育」「36 ライフスタイル」「41 文化」が1回ずつという結果となった。それぞれの号の特集によって割合に偏りが出てしまうものの、一貫して「料理」に関する項目が多く、近年になってまた割合として増えていることが見て取れる。料理の記事については、大橋鎮子もインタビューの中で次のように述べている。

うちは、創刊から料理記事を大切にしてい

ます。「家庭の食事が美味しければ家族は幸せである」という考え方です。世の中が変わっても、この考えは不変です。材料が買やすいもの、作るのに手間のかからないもの、食べて美味しいもの、という三大原則を大切にして記事にしています。(大橋 2001:102)

『暮らしの手帖』の編集部では、創刊から現在まで一貫して「料理」を「幸せ」な暮らしの基本として考えていたということである。合わせて、「ライフスタイル」に関する記事も割合として多く割かれている。花森自身が1954年に創出した「ある日本人の暮らし」というシリーズがあり、ここでは、どこで取材交渉したのかと思わせるような市井の人々の「普通」の暮らしのルポルタージュが紹介されている。その他の特徴として、「医学・健康」や「育児・教育」は、1970～1980年代に多く言及されており、「できごと」に関する項目もこの時期に多い一方で、近年では少なくなっているようだ。

そこで、次節では割合が一貫して多くあった「料理」と「ライフスタイル」、そして「できごと」に着目し、これらがどのように語られているのかについて、誌面から読み解いていく。

### 4.2 「料理」「ライフスタイル」「できごと」項目の語り方

#### 4.2.1 『暮らしの手帖』における「料理」の語り

『暮らしの手帖』の中では、ほぼ毎号掲載される連載的な形で、「ロイヤルホテルの家庭料理」「今夜のおそうざい」「おそうざいふう世界料理」「今夜のメニュー」(「日曜日のメニュー」)という括りの中で料理記事が展開されている。これらは、それぞれ4～8ページほどずつ取られており、できあがりの料理写真に加えて、料理過程の写真と手順のテキストとで構成されている。多くの場合、有名料亭の料理人に暮らしの手帖研

表3 『暮らしの手帖』の内容割合（筆者作成）

大分類	中分類	『暮らしの手帖』														
		1955年秋	1960年秋	1965年秋	1970年冬	1975年秋	1980年秋	1985年秋	1990年秋	1995年秋	2000年秋	2005年秋	2010年秋	2015年秋	2020年春	
1 おしゃれ	11 美容	0.0	4.1		1.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	12 ファッション	0.0	2.4		2.7	4.8	1.4	4.9	4.4	8.3	9.8	6.5	2.2	3.3	0.0	0.0
2 家事	21 料理	30.0	15.9		10.9	21.2	6.3	11.8	20.1	10.8	10.3	12.0	23.9	30.0	27.2	27.2
	22 裁縫	0.0	2.4		1.8	6.7	0.0	6.4	0.0	2.0	1.0	1.1	4.3	2.2	4.3	4.3
	23 インテリア	6.9	7.7		11.4	0.0	0.9	0.0	3.9	1.0	4.4	3.8	12.5	8.7	0.0	0.0
	24 育児・教育	3.2	14.2		0.0	5.8	8.6	4.9	3.9	12.7	8.8	3.3	1.0	0.5	1.6	1.6
	25 医学・健康	2.8	6.5		18.6	5.8	12.9	14.2	7.4	7.4	12.3	5.4	3.3	3.3	3.3	3.3
	26 家庭・家政・家事	8.3	8.1		0.5	5.3	5.7	5.4	0.0	3.9	3.4	0.0	9.2	4.9	0.5	0.5
	31 恋愛・友人	0.9	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
3 生き方	32 家庭生活	4.2	0.0		2.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	6.5
	33 仕事・職場	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	34 セックス	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	35 心理・救済	0.0	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	36 ライフスタイル	10.2	13.4		0.9	8.2	7.7	14.7	10.8	6.9	5.4	13.0	5.4	14.7	17.4	17.4
4 余暇	41 文化	12.0	4.1		18.2	13.5	8.2	12.3	13.2	10.8	9.8	20.7	14.7	7.6	10.3	10.3
	42 レジャー	7.4	2.8		1.8	2.9	9.1	0.0	8.3	2.0	5.9	4.3	4.9	4.3	5.4	5.4
	43 食べ物	3.7	0.0		0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.7	2.7
5 でまごこと	51 政治・経済・社会	0.0	4.5		5.5	1.9	6.7	1.0	4.9	0.0	8.3	9.2	2.2	2.2	0.0	0.0
	52 事件・時の話題	0.0	0.1		0.0	8.2	4.9	0.0	0.0	5.9	0.0	0.0	0.0	0.0	4.3	4.3
6 その他	61 読者投稿	2.8	0.0		6.8	8.2	9.8	9.3	8.8	6.4	2.9	2.2	3.3	2.7	2.7	2.7
	62 自社広告	4.1	0.0		3.6	4.8	4.8	4.4	7.8	9.3	11.3	9.2	8.7	8.7	6.5	6.5
	63 その他	2.8	5.7		12.3	2.4	2.5	9.8	6.4	11.3	6.4	7.6	4.3	8.7	8.7	6.5

究室まで来てもらい、一般家庭と同じ火力の中で料理を再現、編集部員が手ほどきを受け、料理するという方法をとっていたようだ（唐澤1997、大橋 2001）。

1960年秋号、1975年秋号の料理ページの写真から、一見して言えることは、見開き1ページに対して料理の写真がかなり大きく取られているということだ。特に、料理の過程を伝える写真が、ページを縦に3分割した大きさとなっており、モノクロの写真であっても手の動きの様子などがわかりやすい。そして、写真には手順番号も付されており、テキスト情報と写真情報とを合わせて見られるようになっている。料理ページの扉に掲載されている料理のできあがりの完成写真も非常に大きく、真上からフレームいっぱい撮られた写真が採用されている。小鉢のような料理も、メイン料理であるかのような写りになっているのが特徴的である。このことは、先の大橋のインタビューにあったように、料理が暮らしの基本であるということの表れとも言えるだろう。1975年秋号には、料理写真にもカラーがふんだんに使われるようになり、より鮮明に手の動きや素材の状況が見えるようになった<sup>8)</sup>。

このような構成の料理記事は、2000年秋号まで続いている。1978年には花森が他界し、その後も、同じような写真や手書き文字で料理が語られるも、レイアウトとして迫力がないことが多々あった。編集にDTPが使われるようになった頃のことであり、活版印刷でなくなったことも大きいだろう。2002年には、初めて外部からデザイナーを雇うこととなり、そのデザイン事務所が、後の『ku:nel』のアート・ディレクションを担当する有山達也氏が運営するデザイン事務所であった。そのあたりから、誌面が余白を使ったデザインに様変わりする。

その後2005年秋号には、デザインに「文京図案室」が入り、炒め玉ねぎの様子を5段階の写

真に分けて撮影するであるとか、かき揚げの油の温度の様子を6枚の写真に分けて伝えるなど、料理過程の細かいところを精度の高い写真を使って伝えるようになった。その料理における見過ごしてしまいそうな大事な点に絞って写真を数枚使って伝える以外には、料理完成図の写真のみとなっており、料理手順のテキストと逐一合わせながら料理過程の写真を使って伝えるというやり方ではなくなった。そして、2015年あたりからは料理家たちを採用し、「〇〇さんの家庭料理」といったような形で、料亭ではない、より身近な料理に目を向けるようになった。

#### 4.2.2 『暮らしの手帖』における「ライフスタイル」の語り

『暮らしの手帖』における「生き方—ライフスタイル」に当てはまる項目は、先述した「ある日本人の暮らし」の記事に尽きる。毎回、日本各地の一つの家族や会社、チームに着目し、10ページほどを使って写真と三人称の文章で語る。場合によっては1年近くかけて取材することもあり、時間をかけて綿密に取材が行われていたようだ（唐澤 1997）。

1955年秋号では、「社宅暮らし」というタイトルのもと、似たような大きさの木造家屋が並ぶ家並みと合わせて、個々の家の中の写真が紹介されている。外見だけでなく、家の中までも似通っていることに書き手（おそらく花森）も驚いている。こういう市井の人々の暮らしの様子を見ていくことによって、次なる『暮らしの手帖』の構想につながっていったのだと考えられる。

例えば、1960年秋号の「ある日本人の暮らし」では、岐阜県にある「親子兄弟夫婦ぐるみ有限会社」について紹介されている。この街が日本地図のどこにあるのか、そして、この場所で住む人たちにとっての「戦後」の話に触れた後に、一気に家族の内なる話に入っていく。工場で働く家族を、働く様子の個々の写真とともに一人



ずつ淡々と紹介し、家の中の写真のページに移ると同時に、ごく私的な内容が綴られる。文章の多くは、書き手が聞き出したことをまとめた文となっており、被写体の言葉の引用も少なく、伝聞調ですらない。次のページには、その工場の家族の子供たちの様子が掲載されている。一枚の写真の中に、襖や縁側などを使ったもう一つの「フレーム」が作られており、家族や子供たち自身だけでなく、家族の置かれている「状況」をも写し取ろうとしている様が見える。こういう写真の撮り方から見ても、『暮らしの手帖』は、「暮らし」と「社会」とは切っても切れない関係にあり、人々の置かれている境遇を常に念頭に置きながら「暮らし」を捉えようとしていることが見えてくるのである。

写真をうまくとるために、いちばん勉強になるのは、映画を見ることだ。たとえば小津安二郎の映画をやっていたら、内容なんていいからカメラアングルだけ注意してみろ。ただローアングルだなんていう見方じゃないよ。構図全体を見るんだ。室内ではライティングもだいじだ。(唐澤 1997: 117)

花森時代の暮らしの手帖社に勤めていた唐澤平吉は、花森の写真に対する考えをこのように記録している。襖や縁側などを使って、フレーム内フレームを作り画面を構成する様は、小津安二郎の映画の中でよく使われる手法であり、ここで使用される写真は、まさに小津的な構図で撮られたものであると言える。同書によれば、『暮らしの手帖』では特別な時以外は、標準レンズで写真を撮っていたとの記述もあり、被写体に対して撮影者自身で距離を取り、映し出すということを徹底していたようである。

一方で、1995年秋号の「ある日本人の暮らし」では、フリーアナウンサーやメイクアップアー

ティストの「暮らし」が伝えられており、いわゆる「普通」の人たちの暮らしを伝える内容から、働く女性を意識した作りが変わっていた。「知っておくべきこと」から「読者の知りたいこと」へとシフトしたことが伺える。

#### 4.2.3 『暮らしの手帖』における「できごと」の語り

今回、分析を行った中では、2005年までの『暮らしの手帖』においては、「できごと」に関する記事が全体の5～10%ほどを占めていた。これは、前項で述べた「社会」や「境遇」の側面から「暮らし」を捉え返す態度とも呼応するものだと考えられる。それでは、どのようなテーマが「できごと」の中で語られていたかと言えば、ゴミ問題や消費者の置かれている状況について、そして戦争についての問題が複数回にわたって検討されていた。ゴミ問題については、先進的な取り組みをしている諸外国の様子が日本との比較で語られたり、私たちが日々出しているゴミの量をプラスチックゴミを積み上げた写真で見せたりするなど、具体的に数字や量で見せる工夫が取られていた。一方、戦争については、新聞社説に対する意見記事や読者の戦争体験等で構成され、文章のみで構成されるものも少なくない。これらの文章は、政府に対する強い意見表明になっていることもあるが、文体は一貫して丁寧語が使われ、政治的なことこそ平易な言葉で語られるきらいがある。

近年の『暮らしの手帖』では、一見すると「できごと」に関する記事が少なくなっているようにも思われる。ただ、これは見せ方の問題とも言え、個人の「生き方—ライフスタイル」に関する記事の背景に、社会問題を重ね、そこから「できごと」に対峙しているとも言えるのかもしれない。この点については、次節の「ナチュラル系ライフスタイル誌」の分析のところで、改めて検討する。

### 4.3 2000年以降のライフスタイル雑誌との比較 (言及分野)

『ku:nel』や『天然生活』、『Lingkaran』といった2000年代はじめに創刊したライフスタイル雑誌については、阿部(2018)においてレイアウト等に着目した分析が行われている。

3誌に共通する文体としては、「余白を重視したミニマルなレイアウト」「露光過剰かつ背景ピンぼけ写真」、そして各ページのコピーに「,」や「。」が多用されることである。華美な暮らしを提示するのではない伝え方として、白を基調としたシンプルなレイアウトにスナップ写真のような普通っぽい写真が選択されるようだ。そして、暮らし系雑誌業界に属するセクターの存在の大きさも特筆すべき点であった。(阿部 2018:35)

上記は、これらナチュラル系ライフスタイル誌のレイアウトの全般的な特徴を示したものである。「丁寧な暮らし」を伝えるという時には、白を基調としたシンプルなレイアウトが採用されることが多く、文章よりも、露光過剰の大判の写真で暮らしの「断片」を伝える手法が取られることが多い。これは、先に見た花森時代の『暮らしの手帖』の「文体」とは一線を画すものである。『ku:nel』のテーマが「ストーリーのあるモノと暮らし」、『天然生活』のターゲットは、「生活はできるだけシンプルに。／だけど、こだわりは常に持っていたい／という女性たち」となっており、今ある暮らしの見え方を少しだけ変化させることに重きを置いているようである。

今回は、『暮らしの手帖』との比較を行うために、2000年以降のライフスタイル雑誌『ku:nel』と『天然生活』の2誌について分析を行った<sup>9)</sup>。『暮らしの手帖』と同様、2005年、2010年、2015

年の5年毎の秋に出された号に絞って内容分析を行った。その結果が、表4である。

こちらでも、一つの号の中で一番多く割合が割かれているのを見ると、「21 料理」が4回と半数以上を占め、突出して多いことがわかる。その次に来るものが「36 ライフスタイル」であることから、ここでもこの2項目に着目して、語り方の分析を行う。

#### 4.3.1 ナチュラル系ライフスタイル誌における「料理」の語り

『暮らしの手帖』と比較した上で、「料理」の語り方の違いとして特筆すべきは、『ku:nel』『天然生活』ともに、料理の過程に関する写真がほほえないということである。1ページの7割程の大きさで料理の完成写真がどんと配置され、作り方については細かい文字で隅に付されるのみである。

『天然生活』においては、料理の盛り付けも家庭的というよりは、ファンタジー風の装飾が施されており、何か特別なこととして料理が描かれているようにも思われる。料理写真の背景も、ピンクや薄い黄色といったパステルカラーの壁紙が使われ、周りに直接料理には関係のないさまざまな小物が配置されていることから、かなり演出の入った写真となっている。

対して『ku:nel』の方は、高山なおみ氏や高橋みどり氏といった人気の料理研究家のテキストメインの実用的なレシピを連載として掲載するほか、「ライフスタイル」記事にもカウントできそうな、郷土料理を作る人や食べる人についての記事の中に、作り方も載っているというつくりになっており、ここでも料理を作ることがメインとして語られていない印象がある。これは、見方を変えれば、『暮らしの手帖』が目指していたような、家庭での完璧な料理の再現を目指していないとも言える。その意味では、実用的な料理の記事ではなく、誰かの料理を情報として知ること、もしくは盛り付け方といった

表4 『天然生活』『ku:nel』内容割合（筆者作成）

大分類	中分類	天然生活			ku:nel		
		2005.10月	2010.10月	2015.10月	2005.9月	2010.9月	2015.10月
		138頁	114頁	114頁	134頁	122頁	122頁
1 おしゃれ	11 美容	0.0	4.4	0.0	0.0	0.0	0.0
	12 ファッション	2.9	34.2	10.5	6.0	5.7	21.3
2 家事	21 料理	34.8	13.2	29.8	13.4	26.2	16.4
	22 裁縫	13.8	4.4	4.4	15.7	0.0	0.0
	23 インテリア	0.7	12.3	13.2	6.0	6.6	0.0
	24 育児・教育	9.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	25 医学・健康	3.6	1.8	0.0	0.0	2.5	0.8
	26 家庭・家政・家事	0.0	0.0	7.0	0.0	0.0	1.6
3 生き方	31 恋愛・友人	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	32 家庭生活	0.0	0.0	0.0	4.5	6.6	1.6
	33 仕事・職場	0.0	3.5	0.0	0.0	0.0	0.0
	34 セックス	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	35 心理・救済	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	36 ライフスタイル	13.0	7.9	12.3	16.4	22.1	27.0
4 余暇	41 文化	3.6	1.8	7.0	9.7	10.7	9.0
	42 レジャー	0.0	1.8	0.0	4.5	3.3	8.2
	43 食べ物	0.0	0.0	0.9	0.0	0.0	0.0
5 できごと	51 政治・経済・社会	2.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	52 事件・時の話題	0.0	0.0	0.0	1.5	0.0	0.0
6 その他	61 読者投稿	0.0	1.8	1.8	0.0	0.0	0.0
	62 自社広告	0.0	2.6	2.6	2.2	2.5	0.8
	63 その他	6.5	2.6	2.6	8.2	5.7	9.8

料理の付属的な部分に重点が置かれているようだ。

三浦哲哉は、1990年代後半から2000年代前半にかけて、料理雑誌や料理本の写真の様相が一変したと指摘している。ある料理の完璧な視覚的説明を写真に求めていたのがこれまでの料理写真であるとしたら、上記の時期に現れた料理写真は説明的であることが求められず、「ごく浅いフォーカスによって、この野菜の瑞々しい肌理のごく一部だけを注視」（三浦 2019：67）する「引き算」の写真が用いられるようになっ

たという。この意味では、『天然生活』は「足し算」の料理写真で見せていると表すことができる。このように、料理についてどこまで「説明」し、どこから読者に委ねるかの線引きが、ナチュラル系ライフスタイル誌が登場するあたりから揺らぎ始めたと言える。

#### 4.3.2 ナチュラル系ライフスタイル誌における「ライフスタイル」の語り

「ライフスタイル」の語りについても、花森時代の『暮らしの手帖』との比較で考えると、文章よりも写真で語ろうとするところに、ライフ

スタイル雑誌の特徴があると言える。『天然生活』2010年の号では、亀の子束子の職人についての記事が掲載されており、昔ながらの日常用品が作られる現場を紹介しながら、家業や職人の来歴が語られる。ページの8割は写真で占められており、文章は下段1段に収められている。『天然生活』では、いわゆる「普通」の人を載せるというよりは、ライフスタイル雑誌界隈の著名な専門家や、職人について紹介する傾向がある。ここで語られる「ライフスタイル」を指針にするというよりは、読者たちの日常にあるモノやコトの背景をストーリーとして知り、読者に再発見させることという意味合いが強くなるようだ。

一方で、『ku:nel』においては、紹介される人たちは、職人や『ku:nel』に関わる専門家のこともあれば、何かの専門家であったとしてもごく「普通」の人として描かれることも多い。例えば、2005年の号では、フード・コーディネーターの女性の30歳を前にした引越しの様子が伝えられており、読者にとっては等身大の物語として映ると考えられる。写真：文章の比は3：1であり、『天然生活』よりも読むことに重きをおいた記事のつくりになっている。ここでは、被写体の朝ごはん作りについての文章が長く続いた後に、見開き1ページの手ブレのある流し台の写真が続くなど、一つのストーリーが一つのイメージに固定されない、映像的なシーケンスの中で記事が構成されている。映像的と言っても、『暮らしの手帖』で使われていたような、その人が置かれている境遇をも写し取るというものでもなく、あくまでもその被写体自身の内にある物語を伝えるという形をとっている。さらに言えば、この「ライフスタイル」記事は、その人自身の考えが吐露される記事でもあり、内容分析表のどの項目にカウントするか迷わされることも多い。つまり、一つの記事の中に、料理・住まい・衣服・人生の決断・も

のづくり等々の多ジャンルに渡る内容が盛り込まれるのである。一人の人物・家族像を介して描かれるさまざまな人生物語に対して、読者たちそれぞれが好きなように感情移入できるような構造になっているのである。

この『ku:nel』のような「ライフスタイル」を伝える形式は、北川編集長期の『暮らしの手帖』の「ライフスタイル」記事とも近い。近年の『暮らしの手帖』でも、家族の肖像についての記事が10ページ程にわたって冒頭に掲載されている。ページの上半分が1枚の写真、下半分が文章となっており、絵日記風のレイアウトになっている。同じページ内に配置されているからといって、写真は文章を説明するものではないことが、先の『ku:nel』と共通する点である。花森時代の「ある日本人の暮らし」と比べると、文章上での情景描写は少なく、被写体の言葉を並べていくという手法がとられており、淡々と文章で説明をするというよりは、読者にさまざまな想像を喚起させ行間を埋めるような伝え方となっている。

## 5. おわりに—3誌の比較から見えてくること

本稿では、『暮らしの手帖』を時系列に沿って内容分析するとともに、記事の割合として多く割かれていた「料理」と「ライフスタイル」、そして「できごと」の記事について、語り方の分析を行った。合わせて、2000年以降に刊行された「ナチュラル系ライフスタイル誌」の「料理」と「ライフスタイル」の分析を行うことで、「暮らし」の語り方の違いを見てきた。

『暮らしの手帖』については、料亭や高級レストランの人たちによる料理の作り方を、暮らしの手帖研究室での実作を通して伝えるということが、徹底して誌面に表されており、料理過程の写真と文章とを逸にして伝える手段をとっていた。料理をほとんどしたことがない大江健三郎

氏が、『暮らしの手帖』を参考に美味しい料理を作ることができたとの記録もあり（唐澤1997）、料理に精通していない素人に対してもやさしい誌面づくりがなされていたとすることができる。

対して、2000年以降のライフスタイル雑誌では、料理過程の写真はほぼ使われず、完成写真と作り方の手順のテキストで構成されていた。ここでは、読者の料理を一から支援するというよりは、すでに読者が持っている料理のバリエーションを増やし、料理の「基本」に立ち返る情報に重きが置かれていた。こと『天然生活』では、料理の盛り方を提示することで、料理を家事とは別の次元で見せる形が取られていた。

もう一つの「ライフスタイル」については、花森時代の「ライフスタイル」記事では、市井の人々に焦点を当て、抑揚をつけずに淡々と状況を語り、標準レンズを装備したカメラでもって、読者にも境遇を想像させるような写真のルポルタージュ的な手法が取られていた。一方で、ライフスタイル雑誌では、日用品の工場や郷土料理、古くから言われている規範のような、日々の暮らしの中で見えにくくなっているものを再発見させるような形式で、それらに関わる人たちに焦点を当てて、歴史や文化的なことと人々の暮らしとを合わせ鏡にしながら語る手法が取られていた。そして、「普通」の人々にも着目する点は、3誌ともに共通する点であった。

ここで、本稿の「丁寧な暮らし」として語られる「暮らし」とはどのようなものであるかの問いに立ち返って考えてみたい。『暮らしの手帖』は、戦後すぐの食べ物も何も十分でない時期における「暮らし」の再建に向けて作られた実用雑誌であり、このことは料理の語りからも見て取ることができた。一方で、ライフスタイル雑誌においては、家事に関する一つ一つの説明に重点を置かず、あくまでも暮らしの一部として取り扱うような語りの形式が取られていた。

『暮らしの手帖』においては、今ある暮らしの背景に「社会」や「制度」があることを鑑み、全国各地の市井の人たちの暮らしにカメラを向け、時事的な問題にも積極的に切り込むことによって、私たちのいまある境遇が自分たちのみ起因するのではないという構造を見せていた。これに対し、ライフスタイル雑誌では、一人一人のいまある暮らしが映像的に紹介され、これらの「暮らし」がどの「社会」に根付くものであるのかといった背景は明示されない。このことによって、「基本に立ち返る」といった記号的な部分のみが一人歩きし、「丁寧な暮らし」批判のような動きを作ってしまったと言える。

以上のような暮らし語りの「引き算」化、脱情報化の流れは、現代社会のどのような背景と呼応し、どのように読者たちを巻き込んでいるかについては、次稿以降の課題としたい。

## 注

- 1) 「丁寧な暮らしではなくても」のコピーにまつわるさまざまな意見については、阿部（2020）にまとめた。
- 2) 阿古（2019）によれば、「丁寧な暮らし」的な暮らしを再考するブームは、これまでに3回あったという。1回目はオイルショック後に起こった手芸や洋菓子などの手作りブームで、2回目は平成不況を背景に起こったスローフードブーム、そして、3回目は東日本大震災以後の機運とされている。ただ、「丁寧な暮らし」という表現で世の中に浸透したのは、本文で挙げたライフスタイル誌が出た2000年頃のことだと思われる。「Siesta!」などのフリーペーパーを刊行していた柳澤小実氏も2003年に『ていねいな暮らし』というタイトルの本を出しており、その後、2007年1月発売の号より『暮らしの手帖』編集長を務めた松浦弥太郎氏が、「今日もていねいに。」という文言を「編集者の手帖」の最後につけていたことから、一気に浸透したフレーズであった。
- 3) 2021年12月現在、「丁寧な暮らし」で検索エンジンにかけると、検索候補として「うざい」「嘘」「胡散臭い」「痛い」といった言葉が筆頭に並ぶことになり、否定的な意見も多く語られている。
- 4) 2016年1月に[ku:nel]は新装刊され、「ストーリーのあるモノと暮らし」から「自由に生きる大人の女性へ！」へと、キャッチコピーも変化した。

- 本稿内の『ku:nel』は、新創刊前の初期『ku:nel』を指す。
- 5) 『雑誌新聞総かたろぐ』では、『暮しの手帖』は「生活情報」に、『ku:nel』や『天然生活』は「女性総合誌」に位置付けられていた。それぞれの包含するジャンルは、次のとおりである。「女性総合誌」：女性総合誌，婦人誌，ニューファミリー誌，家庭生活誌。「生活情報」：家庭誌，生活全般，生活設計，結婚，ショッピング，家政学。
  - 6) 一方，大塚英志（2021）は，大政翼賛会時代の花森安治が刊行に携わっていた衣服に関する冊子について言及し，「暮らし」を規範化しようとするこの時期の刊行物と『暮しの手帖』を并列に捉え，警鐘を鳴らしている。
  - 7) 『暮しの手帖』では，100号ごとに一つの区切りをつけ，それぞれを「第1世紀」「第2世紀」と呼んでいる。
  - 8) また，花森時代の『暮しの手帖』について，この雑誌が庶民に向けてのものであったかに疑義を挟むものもある。飯尾（1960）では，本誌で取り上げられる「すまい」や「料理」は当時の平均月収に見合うものであったか，このことについて「擬似中間階級化」（飯尾 1960：146）という表現を用いながら，精緻に批判を加えている。
  - 9) 『Lingkaran』は2009年に休刊しており，5年毎の比較という本稿の方法では1誌しか扱えないため，今回の比較から除外した。

## 参 考 文 献

- 阿部 純（2016）「地域暮らしを書くこと—『ku:nel』的地域文化誌が見せる「ライフスタイル」—」，福山大学人間文化学部紀要，第16巻，pp. 1-20.
- （2018）「暮らし系雑誌における2003年—「暮らし」を語るための3基軸—」，福山大学人間文化学部紀要，第18巻，pp. 18-38.
- （2019a）「暮らし：「当たり前」を問うための文法」（『現代思想』47(6)，pp. 217-221）.
- （2019b）「日常を写すことと条件」（『現代思想』47(9)，pp. 146-154）.
- （2020）「「丁寧な暮らし」をめぐる解釈—『暮しの手帖』」「住まいマガジン びお」<https://bionet.jp/2020/05/18/kurashinotecho/> 2021年12月25日参照
- 阿古真理（2019）『母と娘はなぜ対立するのか』筑摩書房
- 橋本嘉代（2017）「ライフスタイルの多様化と女性雑誌——一九七〇年代以降のセグメント化に注目して」（吉田則昭編『雑誌メディアの文化史 変貌する戦後パラダイム [増補版]』）
- 速水健朗・おぐらりゅうじ（2017）『新・ニッポン分断時代』本の雑誌社
- 飯尾 要（1960）『暮しの科学—新しい家庭の設計—』三一書房
- 井上輝子・女性雑誌研究会（1989）『女性雑誌を解読する—Compareopolitan—日・米・メキシコ比較』垣内出版
- 唐澤平吉（1997）『花森安治の編集室』晶文社
- 小泉和子編著（2004）『洋服の時代 日本人の衣服革命』OM 出版，農山漁村文化協会（発売）
- 三浦哲哉（2019）「引き算の料理写真」『アイデア』No. 387
- 大橋鎮子 [インタビュー]（2001）（池田恵美子編著，『出版女性史 出版ジャーナリズムに生きる女性たち』世界思想社）
- 大塚英志（2021）『「暮らし」のファシズム 戦争は「新しい生活様式」の顔をしてやってきた』筑摩書房
- 坂本佳鶴恵（2019）『女性雑誌とファッションの歴史 社会学—ビジュアル・ファッション誌の成立』新曜社
- 清水豊子（2001）『「女学雑誌」／羽仁もと子…「婦人之友」『主婦之友』／「青鞥」と「新しい女」たち』『出版女性史 出版ジャーナリズムに生きる女性たち』（池田恵美子編著，世界思想社）
- 塩沢実信（1982）『雑誌を作った編集者たち』広松書店
- （2012）『新装版 創刊号に懸けた十人の編集者』出版メディアパル
- 富川淳子（2017）『ファッション誌をひもとく [改訂版]』北樹出版
- 辻泉（2013a）「雑誌に描かれた「男らしさ」の変容：男性ファッション誌の内容分析から」『人文学報』（467）27-66
- （2013b）「女性ファッション誌の過去・現在・未来：内容分析を中心とする，マルチメソッド・アプローチによる実態把握に向けての試み」『人間関係学研究：社会学社会心理学人間福祉学：大妻女子大学人間関係学部紀要』（15）177-199
- 山尾美香（2004）『きょうも料理 お料理番組と主婦葛藤の歴史』原書房
- 米澤 泉（2018）『「くらし」の時代 ファッションからライフスタイルへ』勁草書房
- 雪野まり（2008）『「暮しの手帖」がめざしたもの：—花森安治の美学と広告のない誌面』『出版研究』38(0)，45-65